

# 「宇宙に寄せる想い」 について

首都大学東京大学院  
システムデザイン研究科  
航空宇宙システム工学域  
宇宙システム研究室 修士2年  
花田 行弥



「宇宙に寄せる想い」というテーマを聞いた時、絶対に自分には書けないと感じた。自分で言うのもなんだが、宇宙工学を学ぶ学生の中で私ほどこのテーマにそぐわない人間もそう多くは居ないだろう。宇宙への想いというのは本来、純粋に宇宙を目指して努力を続けるような人が書くべきであり、私のような者が書くなど実に身の程知らずである。それでも、このテーマが私に巡ってきたのは何かの縁かもしれない。そう自分を説得しつつ、恐れ多くも私なりの「宇宙に寄せる想い」を書かせて頂くことにした。

**私**にはよく知人から聞かれる質問がある。「君は何故、宇宙系の学科に居るの？」一見何と云うことの無い質問であるが、これこそ私が今回のテーマにそぐわない人間であることを端的に表していると思う。私はこれまで大学、大学院とずっと宇宙工学を専攻してきた。また、衛星設計コンテストというイベントに二回参加し、チーム代表として超小型衛星を設計した経験もある。

普通であれば、そんな人間に対し上記のような質問は出てこないはずだ。一般的に、宇宙に思い入れある「宇宙好き」な人間でなければそういう経験をしていないだろうし、「宇宙好き」は宇宙系の学科に居る理由に十分なるからだ。にも関わらず、私は大学院2年目になった今もなお「何故宇宙系に居るのか」と聞かれることが少なくない。

要するに（言われる側としては認めたくないが）どうやら私は宇宙に思い入れも何も無い人間と思われているようだ。仮に私のことを余り知らない初対面の方に言われるのならまだ良い。しかし実際に聞いてくるのは、ある程度親しくなり、私をよく知る人間ばかりだ。さすがに私も多少は不貞腐れたくもなる。

この「何故？」という問いは、一般的な宇宙工学専攻の学生なら「宇宙が好きだから」と答えれば済む話だ。しかし残念ながら、私が宇宙好きを名乗っても冗談扱いである。また、かといって真剣に「何故？」と自問すると、思考は堂々巡りで人を説得できるような答えが出てこない。結局、今では苦し紛れにこう答えている。

「むしろこっちが聞きたいぐらいです。」

我ながら全く答えになっていない。

確かに、「宇宙に一途」な方々にしてみたら私は宇宙への興味が弱いのかもしれない。しかし、宇宙に余り興味を持っていない人々と比較すれば私だってそれなりの「宇宙通」である。でなければわざわざ衛星設計コンテストに参加し、超小型衛星の設計などしていない。要するにこれは「興味の程度」の問題だと私は思っている。そしてこの「興味の程度」というものが私にとっては非常に大きな問題なのだ。

誤解がないように予め記しておくが、私は宇宙が好きである。

幼少の頃から、宇宙関係の図鑑をひたすら読み込み、工作の際はやたらと惑星やスペースシャトルをモチーフにしていた。今見れば勝手なイメージで作られ宇宙とは言えないレベルのものばかりだが、細かいディティール（宇宙服の文字盤の鏡文字など）は凝っていて、宇宙好きであったことは十分伺える。

そしてもちろん、今でも宇宙の話題になれば心も躍るし、どんな形であれ宇宙に関わることができれば嬉しく思う。



▲ 小学校低学年時に描いた「宇宙へ」という題の絵

ただ言うなれば、私の宇宙への興味はその程度なのだ。

例えば、私は映画が好きである。中学時代から映画に没頭し、暇さえあればジャンルを問わず様々な作品を鑑賞し、構想を練っては自らで撮影をしたこともある。今でも映画の話題になれば歯止めが効かなくなる上、いつかまた自分で撮るための構想は常に考えている。そして出来れば映画業界に関わりたいという思いも強い。よく人に「所詮趣味だろう」と言われる事もあるが、ただの趣味で終わらせない程度の情熱とこだわりは持っている自負がある。

私の中でこの2つへの興味に差は無い。宇宙も好きだが、映画も好きなのである。

一方で私の周りでは、宇宙工学専攻というだけあって、宇宙が大好きでひたすら宇宙を目指している人が多い。大学の専攻というものが正に目標とする分野を学ぶ場所だと考えれば確かに当たり前の話かもしれない。しかし、大学での専攻が実際の仕事と結びつく例が意外と少ない今の状況を考えれば果たしてどうだろうか。私にとって見れば宇宙に一途になれる人がこんなにも多い方が不思議である。

宇宙は確かに面白い。何より壮大であるし、この世界の神秘や謎の象徴とも言える存在だ。そして宇宙工学を駆使して、この謎に自らが立ち向かっていくことは実にエキサイティングである。或いは、宇宙飛行士になれば他では経験できないことも経験でき、世界中の憧れの的として人々に夢を与えることもできるかもしれない。

ただそれを言うならば、例えば宇宙やその謎を面白いと感じる人間の心理にだって非常に興味がそそられないのだろうか。人が物事を「面白いと感じるメカニズム」自体遥かに謎に満ちている。更に言えば映画等の創作活動は、言うなればその人間の心理を相手取り、如何に楽しませていくかという答えのない戦いに挑むものである。或いは、想像力次第でこの世に存在しなかった全く新しいものを生み出し、世界中の



▲ 映画撮影のロケ風景



人々を魅了する事もできるかもしれない。

「宇宙」と「映画」の例に限らず、私にとって興味の対象として1つを選ぶということは非常に難問である。その意味で、ひたすら宇宙を目指し続けるということは（勿論そういう方がたくさん居ることは知っているが）私には今ひとつ想像がつかない。過去に一度議論が白熱した際、「何かに一途な人は視野が狭いのではないか」と暴言を吐きかけたことがあるぐらいだ。その時は冷静になって思い止まったが、もしかしたら今でも心のどこかではそういった思いが捨てきれずに残っているかもしれない。我ながら意地でも張っているのかと思うほど、宇宙に興味を絞ることが未だにできないでいる。

さて、ここまで読まれた方はこう思われているかもしれない。

「じゃあ君は何故、宇宙系の学科に居るのか？」

全くもってその通りだ。十分お分かり頂けたと思うが、要するに私がこんな考えをしているせいで前述のような質問が出てくるわけである。

「宇宙好き」の人からすれば宇宙よりも他のものに興味を持っているように見え、かといって問い質せば「宇宙好き」であることを譲らず「興味の対象を選べないだけ」と言う。しかし一方で大学や大学院の受験においては専攻を宇宙工学1つに絞るという、言葉と矛盾するような行動をとる。そんな面倒な人間、私だったら少し距離を置きたいぐらいである（その点周囲の人間は実に良く付き合ってくれているものだ）。

ただ、一点だけ私にも言い分がある。興味を選べないと言いつつ宇宙工学専攻を選ぶことは一見矛盾に聞こえるが、私なりに筋の通った理由があったのだ。

実は私が現在の様に宇宙工学を専攻しようと思った際、「宇宙」か「映画」か、というように、専門とする内容を天秤にかけたわけではない。私が比較したのは「専門を学ぶ場自体」にどれだけ興味を惹かれるかであった。そして私は、その他を専門とする環境と比較して、宇宙工学専攻という環境そのものにとりわけ興味を惹かれたのである。

興味と言っても、当時は今以上にモノを知らず、宇宙工学そのものに対して大した知識もなかったのだ。今思えば実に勝手なイメージで語っていた気もする。ただ、当時の私にとって、宇宙工学を学ぶ環境以上に興味深い環境は無く、その時の感覚は正解であったと今では自負している。

そして、いざ実際に宇宙工学専攻という環境に入ってみると、設備や環境、人間も実に多様でそこから得られるものも実に膨大であると実感した。実際にこれまで学べたことは非常に多く、そしてこれ

宇宙という研究対象が余りに広いからだろうか、最も顕著な特徴として、学ぶ環境自体が全体的に自由な雰囲気を持ち、学生個人がとても尊重されている印象がある。そのため、学ぼうと思えば非常に様々なものを学ぶことが可能であり、その全てが宇宙に関わっているため興味が尽きることはない。

これからも学ぶべきこともまだいくらでも残っていると日々痛感する。私にとって、今の環境はとても面白く興味が尽きないものなのである。

きっとこれこそが今もなお私が宇宙工学を専攻している理由なのかもしれない。

なお、これまで「宇宙に興味がない」「思いが感じられない」などと言われつつも、数年にわたり宇宙工学を学ぶ環境にいた中で、確信したことが3つある。ひとつはこの環境がやや特殊であること。また、期待した通り宇宙工学が実に面白いものであるということ。そして、それ以上に宇宙を志す人々自体が面白いということである。

この環境下では私がやや特殊にみられることもあるらしいが、もともとこの環境は少々変わっていると私は感じている。宇宙という研究対象が余りに広いからだろうか、最も顕著な特徴として、学ぶ環境自体が全体的に自由な雰囲気を持ち、学生個人がとても尊重されている印象がある。そのため、学ぼうと思えば非常に様々なものを学ぶこと

が可能であり、その全てが宇宙に関わっているため興味が尽きることがない。

その一方、様々な分野を自主的に学ぶことを求められる場面も多く、学生は自分の考えをしっかりと持って、根が真面目な人が多い。そして学生や教員を問わず宇宙というロマンが好きなこともあり、いい大人になっても純粋に夢を持ち続けるちょっと変な人ばかりである。ある人の言葉を借りるならば、「心の貧しい人が居ない」らしい。やや恥ずかしい表現だが、周囲を見ていると不思議と納得がいく。そして何より、そういう人達と共に過ごすことは実に面白く、見ているだけでも飽きることが全くない。

まるで他人ごとのように宇宙工学専攻の環境を褒め称えてしまったが、どうやら私は宇宙が好きである以上に、この「宇宙好き」が居る環境が好きなのかもしれない。一度好きになると中々否定できないものなのだ。

そしてこの環境だからこそ経験できたことや出会えた人々を思えば、やはり自分の選択は間違っていなかったと感じてしまうのである。

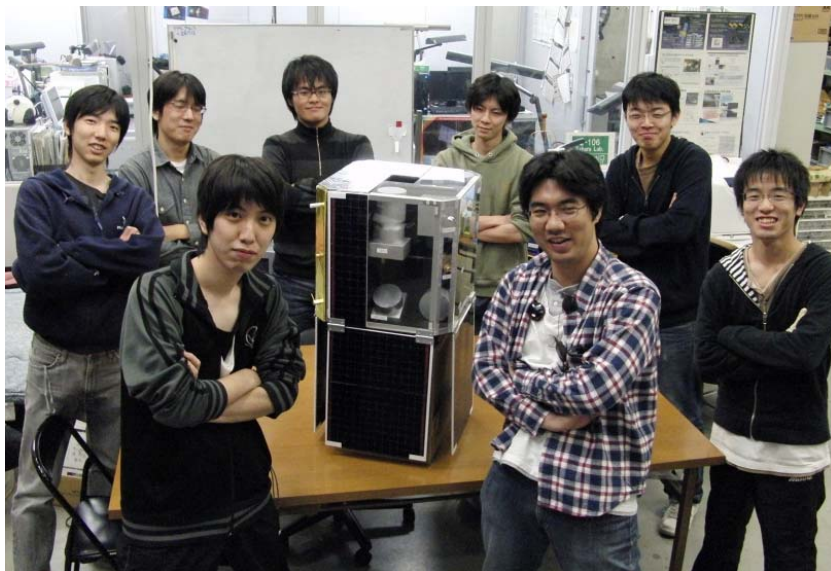
結局「宇宙に寄せる想い」でなく「宇宙に想いを寄せる人々が居る環境に寄せる想い」のようなものになってしまったが、これが私なりの素直な想いである。

今では私の学生生活も修士2年目半ばを過ぎ、いい加減未来を定めなければならない時期である。もちろん私自身も夢や目標があるが、それは宇宙とは少し違うものかもしれない。ただ、大学、大学院と宇宙工学を専攻してきた中で得てきたものは、今後も必ず活かせると確信している。

もちろんこれからまだまだ学ぶべきものも多く、その上で夢や目標をどこまで実現できるのかは私の努力にかかっている所が大きい。だが、いずれそれを実現した上で今自分が居るこの環境に恩返しができるのであれば、その時こそ

「宇宙が好きだから」

と堂々と答えることができるかもしれない。果たしてそれまでに何年かかるかは検討もつかないが、どうやら長期的計画は宇宙工学の得意分野らしい。最悪、遺言状にでも堂々と書ければ良い。ただし、いつか必ず実現することを目指し、これから精一杯努力していきたい。■



▲ 研究室にて、衛星設計コンテスト用の超小型衛星模型と共に（後列左から3人目）

私は宇宙が好きである以上に、この「宇宙好き」が居る環境が好きなのかもしれない。